

川端：大変興味深いお話を頂き有り難うございました。最近はこの大学も同じであろうと思いますが、日々学内の雑務に追われておりまして、改めて地理学についてきちんと考えることや、その歴史をもう一度捉えなおしてみる機会が持てないというか、余裕がありません。それだけに、今日は大変貴重な機会を与えていただいたと思います。

先生のお話の中には我々に対するいくつかの質問がありましたので、今度は我々がそれにお答えする番であると思います。まずは関連する分野の先生方もおられますので、そのような方から是非お答えを頂きたく思います。ここから先はもう司会も何もいたしませんので、皆さんご自由にお考えをお願いできれば幸いです。

とりあえずは、松本さんあたりから口火を切って頂けるとありがたいのですが.....。

松本：では、先に今日の春日先生のお話の中にありました、我々に対する質問の整理をしておきたいと思います。(以下、編集者が要約)

- ①この50年間、地理学に対する世間のイメージが変わっていないのはなぜか。
- ②環境可能論では学問にならないのではないかと、という点についてどう思うか。
- ③地域区分はどれほどの意味を持つものであろうか。何を説明するために役立つのであろうか。また、地域を総合的にとらえるという視点があるが、「総合的」とはどのような意味合いなのか。その有効性とは何か。
- ④今日の国際情勢における地政学 (Geopolitik) の実際上の意義を見直すべきではないか。
- ⑤本来的に地理学というのは pure なものなのか apply を志向するものなのか。
- ⑥地理学におけるシステム論は不十分ではないかということについて。

松本：ところで、私はアルマン (E. L. Ullman) なんていう学者については、都市地理のモデルとかああいうものしか知らなかったのですが、ある書物を読んでいたたら、アメリカの第二次大戦下における地理学は何にも有効性がないのではないかと、その中でアルマンが空間的相互作用論とかその方向に傾倒していく、自分自身でその有効性をもたすためにやったというわけです。その中で、シェーファーが出てきて、日本ではややもするとシェーファーが支持されているが、シェーファーの論文を審査したのはアルマンなのです。

だからアメリカにおける空間的相互作用論の流れは、一方では確かに「Nature of geography」との確執から来ている側面もあったのですが、他方ではアメリカにおける

「Geopolitik」の中で扱われる地理学の位置づけから出てきている側面もあると書いてあり面白く読ませてもらいました。

そういう点では、日本の「Geopolitik」はどうなのでしょう。山野先生が、日本の「Geonolitik」のことを書いていらっしゃいますが....。

山野：えー、あのちょっと遅れてきまして失礼しましたが、最初の方のお話を聞けませんでしたので..... 春日先生のお話の中にあつた、地理学が自然科学的なものか、精神科学的なものかということですが、今までどうもそれについての先生の解答をいただいていないと思っています。もちろん、簡単に解答できるものではないのですが、まあ因果的な説明が必要であるとおっしゃったのですが、これは科学の考え方である訳ですが....、もし解答がいただけるものならいただきたいとかねがね思っておりました。

春日：旧来の学問分類で「何科学」と決めてかかる必要はないのではないのでしょうか？御承知のように因果的な説明を強調したのはヘットナー（A. Hettner）ですが.....、私は実際には因果関係とはそんなに簡単なことではないと思っております。

山野：類型とか分類学的な考え方が必要だということですが、それは理科的なことであり、類型といいましても、類型は因果的な説明とは言えないのではないかと思います。そこらあたりのお考えをもし頂けたらと思います。

春日：分類学が必要だというより、辻村氏の『文化地理学』の紹介に関連して、これまでそうであったと申したわけですが。類型の概念が因果的な説明に対立ないし相容れないものとは言えません。複雑な因果関係の全体を統一的に把握しようとして類型が考えられるのではないのでしょうか。「景観」概念などもそうだと思います。

人文地理学は戦後社会科学のたらしとしたわけですが、途中から文化的なものにだんだん別れて進みつつあるわけですが。そうすると、humanistic という流れもそっちの方にあると思いますが、かたや社会科学的方向に二つに別れてしまっているような気がしますが、それらの中間に radical geograpy があつて、人文地理的方向にも、社会科学的方向にもつけるような変幻自在な力を得て....、今の状況を知りませんが、そう思います。それともう一つ、空間学派であるのですが、それがむしろ社会科学的方向をとろうとしている。まあ3つくらいに別れているように思います。どれをとるかということは研究者の立場だと思います。地理学はこれだということは、ぼくとしては決められないと思います。

山野：それがですね、地理学を非常に難しくしていると思います。地理学的認識を頭の中に組み込めない人がいるという話でしたが、空間概念についても、物理的な概念とそうでない概念とがありますし、その2つは全く素養が違う研究分野であると思うのですが、それが教育するのに困難をきたしています。ですから、地理学は文学部がいいか、経済学部にあるのがいいのかもむずかしいし、地理学にはいろいろな面があって、統一性を考えるのも難しいですね。

春日：それは地理学に限ったことではないと思います。さっき紹介した "The Future of Geography" の中にあるテイラーの論文をみますと、これからの地理学は非常に専門化した研究者の「緩い集合体」として進むほかないだろうということを言っております。それはさっき口にした『地理学がわかる』というあの本をみても、これはやはりそれだなあと…。どれもこれも地理学かもしれないけれども、全体として相互に地理学集合体と考える以外にしょうがないと思います。あるものは実践で重宝されるかもしれないし、あるものは趣味の世界、あるいは思考の領域に行ったりしてですね。ですから、pure geography と applied geography はある意味で有効な二元論だと思います。ただし、pure geography を考えるときは、やはり科学哲学を勉強しないとできないのではないのでしょうか。ただ、フィールドの体験だけでこれを創り上げることはできないという感じがします。答えになったかどうかは分かりませんが…現状は文科科学であるべきか自然科学であるべきかは言えないと思います。文学部にあってもいいだろうし、自由にしてくれたらですが、締め付けられたら居場所はないと思います。

山野：現状では、日本の大学の中で理学部にあつた地理学は衰退していますので、文学部が主体になってくると思います。

松本：1960年代から70年代、経済学が地理学を取り込んだというのは分かるのですが、他に空間概念を取り込んだ学問領域にはどんなものがありますか。

春日：社会学、心理学、教育学など、文科系の学問ではそれらの取り込み方が大きいですね。

松本：心理学においては、やはりメンタルマップとかそういう領域で空間概念を取り込んでいるのでしょうか……

春日：あれに固執しているのは地理学の方で、心理学はその領域にはとどまっていないですね。空間心理学のようなものがありますから、すでにね。

松本：社会学では、やはり都市と農村といったものの中で空間概念を発展させてきたのでしょうか…

春日：いや、そういうのではないと思います。今は、都市と農村を対立的に捉えるといったそういうシンプルな考え方も否定されつつあると思います。他の分野が空間をどういうふうに取り込んで扱っているのかということを確認に回答できませんけれど、とにかくいろいろところで空間概念が導入されていて手に負えないというところでしょうね。20年ほど前、『社会的な空間編成』という本を手に入れたけれども、それもほとんど読まないままで放ってありますけれども。

松本：確かに都市社会学の中で空間概念を取り入れていましたが、社会学の中でそんなに早く取り入れていたのかと思って…。

春日：私の知る限り、空間概念は遡るとジンメルにあるようです。ジンメルは19世紀の終わりにすでに空間の問題を取り上げています。ジンメルの著作の中にも『空間論』というのはあるんです。ですから、そこから来ておりますからですね、ジンメルはラッツェルと同時代にあるんですが、ライブチヒかなんかにね。だから、ラッツェルのことがどこかに書いてあるかと思ってね、一生懸命見るんですが、ラッツェルのラ字も出てないんですね。むしろ、ラッツェルがジンメルに影響されたのかもしれないなどと思ってもみたり…

松本：たしか、ジンメルの近代都市の発生というか性格というところで、改めてジンメルの見直しが行われているように思います。

春日：ジンメルはシュタットを扱った論文もありますしね。

松本：あの当時においては、ジンメルはかなりユニークな社会学者という気がします。

春日：はあ、ジンメルという人はね。ですから、社会学にはそういう伝統がありますので、いちいちそれが表面には出なかったのですが、底流として存在したのでしょうか。20世紀の後半に入ってから、空間というものを扱うのが一つの潮流になってきたという感じがしますね。それまで空間を疎かにしてきたということで……、しかしそれが俄に地理学とか立地論とかいうものの頭の上を通り越してやるもんだから、こっちは戸惑いますね…

松本：なるほど。それが今の、確かに先生のおっしゃったようにポパー（K. R. Popper）の歴史主義の発展ですね。あそこの辺りから、ポパーももちろんそうであったんですが、20世紀の前半は歴史の時代であり、歴史というのがメインテーマだった。ところが、1980年代以降は確かに空間の概念が歴史とか時間とかに関わる大きなキーワードになってきていると思いますね。

春日：だから、そういう中において地理学者というのはあまりにも黙りすぎているのではないかという気がします。もっと元気を出して地理学からの主張をするべきでしょう。第一、僕がこんなことというのはおかしいけれども、読ませるものが欲しいですねえ…

（笑）。アカデミックな研究ももちろん必要ですけども、なるほどなあというのがないと。だから、『地理学がわかる』という本をみても、ぼくはもっとそういうことがあるかと思って期待して見たんですけども、それはないですね。だから、誰にわからせるのかということのを僕は考えるんですがね。これから地理学に入門しようという人に対してのあれなのか。しかし、あれを読んでどうです？ これで自分は地理をやろうという考えを起こさせますか？ こんなことを言うのは何ですが、難しいなあ、難しい論文が載っているという感じを起こさせるのではという感じがしますね。

川端：あの中で面白そうだなあと思わせる文章は、地理の人が書いたんじゃないんですよ。そういう部分を読むと面白そうだなと思うんですが、結局、経歴を見てみると地理学とは違うという矛盾が起きてますね。

春日：地理学というのは個人的関心と叙述形式にとらわれているところがあって、人に読ませる論文にならないという感じがする。スラスラ読めない。だから、地域区分なんかにこだわっているけども、普通の人にはほとんど説得力はないと思うんですね。これこれこれこれの要素を複合したものがこうなる、と試してみたところでね…

秋山：まあ似たようなことを感じたんですが、環境にも似たようなところがあると思うんです。地理学は環境論を捨ててきたということですが、だいたい環境論的な説明をやったのは、自然地理学をやって人文現象を説明する人も多かったと思うんです。地理学が20世紀前半頃に環境論的な説明にいったのは、基本的には19世紀的な自然科学の成果でやろうとしたズレがあったのではないかという気がするんですがその辺はいかがでしょうか。

春日：そうですね。ズレというのは、それを20世紀に持ち込んできたということですか？ うーん、その頃の環境論というのは、今言われている環境論と違うものですか

ね。一種の文明論というか文化論というものだと思いますけどね、大きく言えば。だから、今必要とされる環境論ではないんですね。だから、あの文化や生活様式を説明するために環境論があったわけじゃないですか。だから、僕は必ずしも自然地理学者がやった後、人文地理学者が受け継いだわけでもないように思うんだけど、どうですかね。

秋山：たとえば、生態学などをみてますとね、19世紀には博物学的方法として性格を持っている。ところが、それが20世紀になって生態学が博物学から自然科学へ脱皮してきて、自然科学の歴史の流れの中でスタイルを確保してきた。地理学の場合は生態学の19世紀的性格で環境論的視点を固定させてきた、そういったイメージを持つのですが。

春日：はあ。その一つの地理学の哲学というのがホーリズムですからね。だから、全体論というのが、今のシステムの世界の考え方以前の一つの信仰みたいなかたちで進んできた。地域はまとまっているという、信仰ですね。検証する前から、地域というのは一つのまとまりであると信じ込んで地理学者はやってきたんじゃないですか。だから、システム論というからには、そういう信仰をいっぺん崩さないとダメだと思っているんですよ。だから環境論的ということは、必ずしも環境を意識しなくても、必然的に環境が入ってきたと思います。ヘットナーなどというのは「環境」と言いませんからね。全部「要素」ですから。諸要因ですから。人間も何もかも全部入るということですから。環境論として、むしろ意識しているのは、フランスの地理学者の方が強かったのではないですか。どうですかね。野尻君はどう思いますか。

野尻：ちょっとお話が変わるかもしれませんが…。先生が空間概念ということをおっしゃったのですが、それを考えていて思ったのですが……。空間には絶対空間という地図上の位置・地点・方角ですがあり、それとは別に距離とか時間で示される相対的空間というのがあります。最近、もう一つリレーショナルなスペース、たとえば、差別だとか社会的な関係を反映する空間があります。アカデミックな地理学はだいたいこのような三つの空間を意識してきたと思うんです。しかし、なぜ一般の人には地理学が分かりにくいのかということを考えてみたら、もう一つ別の空間があるんじゃないかと思うようになったのです。

それは、アカデミックな空間とはちょっと違うかもしれないんですが。たとえば、僕はちょっと人に場所を説明するとき、地点、位置、方向で説明するんです。「大阪駅を出て、東に歩いていくと…」というふうに言うてしまうのです。頭の中に地図を描いて。地理学をやっている人にはそれでいいわけですが、でも一般の人には、右とか左で説明した方がわかりやすい。最近の若い人、地理とは無縁の人と接すると、自己中心の感覚、

空間概念があります。たとえば、携帯電話というのは空間を限定しない。公衆電話ならそこまで行ってかけるという必要がありますが、携帯にはその必要がない。どこにいても自分の部屋のような…空間意識のちがひがあります。そして、カーナビが登場して、どこでも、自分の手元に地図が切り取って出せるようになって、地図の上が北ではなく、自分の向いている方が上になっている。そういった中で、地理学のかかわっている空間というものが、一般の人とどうかかわっているのか、自己中心的な位置感覚でしか捉えられない空間や運動空間的に、あるいはそれをもっと超越した空間とか、極めて個人的な空間の集合体として、これからの社会が動いていきそうな気がする。このような厳しい現実を地理学者は受け止めなければならぬのですが、だからこそ地理学者は地理学がそれまで培ってきた伝統的な空間意識を一般の人に普及させていく必要があると思います。

春日：あの一、地理が歴史に対しながら来たということが、ヘットナーなんかがそうで、それはカントに始まることなんです、歴史の論理に寄りかかりながら地理の独自性を主張してきたわけです。しかし、興味的なというか人間的な関心という点からすると、歴史と地理はまるっきり違うわけです。そこのところに、僕は学問の評判とか人気とかいうものの基本的な相違が出てきていると思います。

たとえば、どこか発掘して何か出てきたというと、考古学のファンだという人が非常にたくさん押しかけて、話を聞いたりする。しかし地理学にそれに相当するものがあるだろうかと思えますね。知的関心といいますか、知的興味といいますか、それがまるっきり違うわけですね。そのところをどう考えるかということは、これからの地理学の存亡に関わっているように思うんです。とかく地理学専攻というような部門は、何となく地理学やっていれば何か面白いことがあるかもしれないと思って来る人もあるかも知れないけれども、やはり、それで世の中に出て行くと、少なくとも研究者として、あるいは一般の人を啓蒙する立場の人としては、興味をどう喚起するかということをも考えなくてはならないでしょう。それでまあ、今のIT時代といわれているその中で、人々の感覚というのがどういう風に変わっていくかということで、地図なんか全くいらんとか、旅行はするけれども、そこへと飛んでいけばいいわけだから何もいらんというようになると、地理の知識というものは、どういうところで魅力を出すかということを考えてしまいます。実用面というのと興味の対象としての地理的知識というのと、両方を開拓していかなければいかんと思えますけれども…。もし存続させるのならばですね。

生田：いま先生のお話を伺って、たまたま立命館の地理教育の現場で、地理とはなんだろうかと、このごろずいぶん考えさせられるんです。それで、今日のお話が終わってディスカッションになって、地理学が他の社会科学と比べて著しい特徴といえ、やはり

自然を考えられる、自然と人間の人文現象を両方考えられるというのが地理じゃないかなと思います。そしたら、そこでどういう風に考えていったらいいのかなと、分からなくなるんですけども…。先生のお話の中でホーリズムや環境可能論、環境決定論までは何とかついていけるんですが、結局はその後、地理学者が魅力的な仕事をしてないんでしょね。

日本の地理学は、今まで欧米の導入でしたし、日本というところには地理学が根付かない風土があるんじゃないかと思うんです。日本人は歴史指向性が強く地理に対して関心が薄いというのは、この場所がやはりそのような特性を持った場所じゃないかと思うんです。だから、地理学を魅力あるものにするんだったら、一般向けとしては、たとえば、先生のおっしゃったハンチントンのような、ワールドワイドというか、本当にスケールのかいものが必要になると思います。ハンチントンの著書はアメリカの外交政策のために戦略研究所の所長が書いた本ですので、ずいぶんワールドワイドです。ところが、あれは非常に地理的でもあるんです。日本人の普通の人に訴えるような。

一方でああいうような非常にスケールの大きなことをある意味で必要としているし、もう一方の学問的なところでは、欧米の議論を導入しそれを紹介することが今も続いているのが現実です。先生のさっきの話の中で、システム論のことをおっしゃいましたが、システム論といえば、僕も都市システムの問題には関わりがありますので答えておきたいと思います。そもそも都市システムについては、愛知教育大の安部さんが紹介したのですが、欧米の文献によると都市システムというのはこのように扱われている、だからそういうやり方でいいのだという考え方が日本の都市地理学者にあります。つまり、欧米がこうだからそれでいいのだと。しかし、日本の場合ですと、アメリカの概念の受け売りでは具合悪いと思うんです。欧米に対して何かオリジナルなアイデアを出そうと思うと、欧米がこうだからこれでいいのだという考え方はおかしいのだと思います。とにかく学問レベルでは地域性に根ざした緻密なものを進める必要があると思います。

システム論についていうと、パーソンズやスペンサーの言うようなああいうような議論のレベルに達している人はいませんよね。あれは経済と政治と教育というそれらの領域が相互に対象となっているものを議論としているわけで、そういうものを汲み取ったものがシステム論であるべきだと思います。

春日：だから、それに張り合えるだけの空間システム論なり、地域システム論が出てこない、とてもシステム論と言ってるに値しないのではないかと思います。特に本の表題として書くからには。

大場：あの一、時代状況としてはですね、むしろ、地理が考えているような地域ですか、あるいは空間の編成といったものは、議論しやすいというか、改めて検討しやすい

時代だと個人的には思っています。たまたま、地誌学の担当をするようになったんですが、といっても、僕が担当しているのはEU諸国の地誌です。先ほど春日先生のお話の中で、地誌を考えるうえで「総合とは何か」という疑問を寄せられまして、そのことについてずっと考えて、あるいは考えないといけないなと思っていました。今地誌を担当していて、「総合とは何か」を授業で話すのではなくて、むしろ地域間関係を中心に話をしようかと思ったわけです。ただ、そのときに重要なのは、たまたま扱っている地域が地域だということでやりやすいのですが、EUでは地域なり、あるいは、空間のまとまりの枠組みが音を立てるようなかたちで崩れつつあるわけですね。さしあたりは経済のあたりから。でもそれは、人とか物、あるいは資本の移動が自由化するというのですが、自由化するということは、具体的に、地域の編成の体格でどう変わっていくのか、たとえば従来は縁返部にあった地域が俄然注目される。あるいは、今まで国家単位で動いていた政策決定というものが地域単位になる... もちろんまだ政治的な統合は進んでいませんから、国家間の関係はネゴシエーションの段階もあれば、ドイツは国家単位の統合ができていないと思いますから、ドイツのように現実には小単位の地域が独立して発展していくのともつながっていくわけです。それから一方で、話がちょっとずれますが、経済現象自体は、EUを除いても、いわゆるグローバル化が進んでいるわけです。先ほど生田さんがスケールの大きなとおっしゃいましたが、そのようなことを考える時代になっていると思います。どうなんでしょうか。

春日：もちろん、そうだと思いますよ。そりゃあ戦前の状態にくらべたら。だから地理学だけが守っておれないというそういう悩みがあるので、これはボーダーレスなんですね、学問・研究対象も。ボーダーレスなるがゆえに、地理学もまた、そのボーダーレスにさらされるわけです。だから、そのところでやはり、地理学ものろしを上げないと、レゾンデートルなきことになってくるので、さっき言ったように空間概念もどんどん持っていかなければ。たとえば、社会学なんかにはね。おそらく社会学の方がメジャーと思われるおらんでしょうね（笑）。ところが、経済学というのもメジャーな学問で、空間とかそういう皮相的な瑣末なことに拘らないのですね。もっと大事なことがあるというプライドを持っておるようですね。だから、空間経済学というのはちょっと重要度が低いというような気がしますね。

生田：しかし経済学においても、ものすごく空間概念を議論してますよね。

春日：してます。してるんですが、地理学が扱ったような空間には関心が案外ないんじゃないでしょうか。ありますか？

生田：ポール・クルーグマン (Paul Krugman) なんかはそのへん書いてます。地理学の言う空間とは完全に同じじゃないでしょうが、わりと地域を意識してる…。

春日：彼についてはよく知りませんが、その意味で珍しい人じゃないでしょうか。あれをアメリカの経済学者の一般的ななものと思えるでしょうか…。

生田：アメリカの経済学のたいていはモデルから入っていますが、それ以外にも経済学者で地理というものを意識した人はいるのでしょうか？

春日：経済学者のことはよく知りませんが、もちろんおるでしょう。

生田：アメリカの経済学が、地理的な空間を問題にしていらないとはいえないのではないのでしょうか。

春日：アメリカ経済学全体のことは存じませんが、だから戦後はアメリカで立地論や経済空間論、さらに地域科学へと発展したわけでしょう。

野尻：ポール・クルーグマンという、彼は非常に農業地域とか、開発途上地域と、一方で先進国大都市という180度違う二つの場所が存在することを前提としてモデル化して、較差が広がるという図式をたてましたから。それから自己組織化、アイデンティティの自然発生的な、だから歴史性を重視しているのだけれど、経験的な歴史性は自然発生的ということで、いっさい議論というものをオミットしていて、最初から極端な地域設定を二つとって、その間の較差が広がることを前提として作るわけですね。だからモデルが作りやすいとしてそういうことになるんですが、それは従来経済地理学がやってきた中の基本的な経験的なチューネン (Thunen) なんかのモデルと同じものではないかと思います。

生田：でも抽象度は高いですよ。その中に時間と地域を組み込んで一つのモデルにしたという点で。だからといって別にフレームをアピールするわけではないですよ。

秋山：K. E. ボールディングが『二十世紀の意味』(岩波新書) という本を書きましたよね、1963年ぐらいに。あの中で、地理学というのは社会科学の中で重要なディシプリンの一つだということが書いてあって、分布に関する大切な学問だということも書いてましたが、このようなことを高名な経済学者が認識しているにもかかわらず、一般化してこなかったというのが問題ではないかと思います。

川端：あの一、盛り上がってきたのですが、ちょっと会議室の使用時間が尽きてしまいましたもので。とりあえず一旦、このあたりで切らせて頂きまして、続きは場所を変えまして食事を取りながらやって頂くということにしたいと思います。本日は、皆様どうも有り難うございました。

(終)